

シンフォニー音楽劇

— 活動報告と考察、音楽劇が有する可能性について —

Symphony Music Theater
— A Report and Assessment of Music Theater with Orchestra, with a Focus on Its Potential Applications —

川田 健太郎 *KAWADA Kentaro*
(音楽領域)

はじめに

2021年3月27日から5月3日に渡り、シンフォニー音楽劇「蜜蜂と遠雷—ひかりを聴け—」が神奈川、大阪、福岡の3都市にて全20公演催された。本稿はその公演演奏者であるピアニストとしての立場から、シンフォニー音楽劇の活動を報告するとともに、その考察を行い、今後に向けた可能性を検証することを企図したものである。

「シンフォニー音楽劇」という名の通り、本公演は開催期間フルオーケストラを使用した前例のない大掛かりな演劇舞台として企画された。原作は恩田陸氏による長編小説「蜜蜂と遠雷」。史上初めて、直木三十五賞と本屋大賞のダブル受賞をしたことから社会的にも大きな話題となった作品である。内容としては、国際ピアノコンクールの舞台に挑む4人の若きピアニストたちの葛藤や成長を描いた青春群像小説で、これをモトイキシゲキ氏、藤澤浩一氏の脚本・演出により上演されたものである。

公演概要

シンフォニー音楽劇「蜜蜂と遠雷—ひかりを聴け—」
全2幕（1幕70分、2幕60分 計130分）

・横浜公演（12公演）

会場 KAAT 神奈川芸術劇場〈ホール〉

2021年3月27日～4月11日

・大阪公演（3公演）

会場 新歌舞伎座

2021年4月17日～4月18日

・福岡公演（5公演）

会場 博多座

2021年5月1日～5月3日

配役／出演

風間塵 中山優馬
栄伝亜夜 ヒグチアイ
マサル・カルロス・レヴィ・アナトール 奥村颯太（関西ジャニーズ Jr.）
小山内 健 大東立樹（ジャニーズ Jr.）
高島明石 パーマ大佐
高島美智子 黒田こらん
ナサニエル・シルヴァーバーグ 木村優一
ヴィクトール吉川 富岡弘
田久保 寛 石井智也
浅野耕太郎 優志
大林静雄 小坂正道
仁科雅美 柳橋さやか
貴島恵子 城あすか
嵯峨三枝子 湖月わたる
菱沼忠明・ストーリーテラー 池畑慎之介

指揮 千住明
ピアノ 川田健太郎
管弦楽 横浜公演 Grand Philharmonic TOKYO
大阪公演 Grand Philharmonic KYOTO
福岡公演 九州交響楽団
原作・作詞 恩田陸

音楽監督 千住明

脚本・演出 モトイキシゲキ／藤澤浩一

ステージング演出 林希
演出助手 荻原秋裕
舞台美術 加藤ちか
大道具 伊藤榮計（王様美術）
照明 柏倉淳一（オールライトアソシエイト）

音響・効果	戸田雄樹（エディスグローヴ）
映像	ムーチョ村松、手代木梓（トーキョースタイル）
舞台監督	小笠原幹夫
歌唱指導	今井マサキ（CRESCÉ）
ピアノ指導	石川薫
衣装デザイン	岩倉めぐみ
衣装進行	溝口貴之（東京衣装）
ヘアメイク	中原雅子（My Miracle）
宣伝美術	隆俊作（FRENGE）
宣伝写真	taro
Web制作	メテオデザイン
宣伝	永田全宏（Future PR&Media）、石橋千尋（エイベックス・エンタテインメント）
票券	鈴木彩里衣（エイベックス・エンタテインメント）
制作助手	立野順子
制作	田根克彦、飯塚靖人、三浦龍彬（アオイスタジオ）
アシスタントプロデューサー	木村彩紗望（プロデュース NOTE）
プロデューサー	山浦哲也（エイベックス・エンタテインメント）
ピアノ提供	株式会社ヤマハミュージックジャパン（横浜・大阪公演）
協力	ローランド株式会社（横浜・大阪公演）
企画協力	幻冬舎
企画・制作	シンフォニー音楽劇「蜜蜂と遠雷」制作実行委員会
主催	シンフォニー音楽劇「蜜蜂と遠雷」制作実行委員会（横浜、大阪公演）、 博多座（福岡公演）
提携	KAAT 神奈川芸術劇場（横浜公演）

企画背景

今回のシンフォニー音楽劇「蜜蜂と遠雷」の前段企画として、2018年、2019年に開催された朗読と演奏のコラボレーションによる朗読劇（リーディングコンサート）が挙げられる。筆者はいずれの公演もピアニストとして参加した。

本企画は、作品の世界観をより深く表現するため、視覚に訴える音楽劇での開催を試みたものである。

キャストは俳優、女優の他、ジャニーズ、シンガーソングライター、宝塚、芸人など幅広い業界からのキャスティングとなった。

音楽監督には、作曲家の千住明氏を迎え、管弦楽は東京、大阪公演は特設オーケストラ

(Grand Philharmonic TOKYO、Grand philharmonic KYOTO)、福岡公演では九州交響楽団が担い、筆者はピアニストとして、4人のピアノコンテストの登場人物が演奏するピアノ独奏曲、ピアノ協奏曲を含む楽曲の他、劇伴音楽、劇中歌の全てを担当した。

なお劇中歌の作詞は、原作者の恩田陸氏自ら担当するとあって、開催前から話題となった。

本番までの稽古、準備

役者だけの稽古は2021年2月末より開始したが、オーケストラとの合同稽古は舞台直前であった。例えば横浜公演の場合、初日(3月27日)の2日前、3月25日からである。それまでは筆者によるピアノ演奏や、仮音としてコンピューターで作成された打ち込みの録音を使用し、稽古を進めていった。台詞きかけのタイミングや演奏時間の尺などは音楽監督と筆者、演出家の三者ですり合わせ、都度変更、修正を行なった。

この物語は風間塵、栄伝亜夜、マサル・カルロス・レヴィ・アナトル、高島明石などのピアニストが登場するピアノコンクールが舞台であり、役者によるピアノ実演シーンが演出として避けられないため、主要キャストにはピアノ経験者が抜擢された。また彼らに対しては稽古と並行してピアノレッスンが、筆者とピアノ指導担当スタッフの2名により実施された。主に音楽チームと役者の稽古は、劇中歌の稽古、台詞や詩の朗読に合わせてピアノを弾くタイミングや尺の確認などを行なった。また、舞台中央に配置されたピアノ1(図1)で役者が演奏し始めたものを、曲の途中で舞台上手に配置されたピアノ2(図1)に切り替えて筆者が演奏を交代し、役者は演技に移る場面のタイミングや確認などを特に入念に行なった。

使用楽曲はエリック・サティの「ジュ・トゥ・ヴ」やドビュッシーのベルガマスク組曲より「月の光」、ショパンの「バラード2番」などである。

舞台演出上の特徴

舞台演出上の特徴は、コンクールが舞台のため、オペラのようにオーケストラがピット内に入るのではなく、舞台上に設置されたことである。そのため本音楽劇では、役者のアクティングスペースをどう確保するかが最大の鍵となった。

舞台概要：オーケストラの編成は、弦楽器10型(10-8-7-6-5)の36名、管楽器17名、打楽器3名で、総勢56名。その前にピアニストと役者が演奏するフルコンサートグランドピアノが2台配置された(図1)。中央のピアノ1は役者による演奏シーンもしくは筆者による演奏、物語上で視覚的に主となる場面で使用し、上手のピアノ2は、劇中歌の伴奏や、先に述べた曲の途中で役者から筆者に受け継がれる演奏場面などで使用した。視覚的中心はピアノ1のため、ピ

写真 1



写真 2



写真 3



アノ2は最低限楽譜と手元が見えるまで照明を絞り、あくまで影武者としての立ち位置で演奏する楽器として使用された。

課題克服に向けた取り組み：

- (1) オーケストラの中央部分と管楽器、打楽器の間にスペースを作り、オーケストラ中を役者が往来できるアクティングスペースを確保した（図1）（写真1）。
- (2) オーケストラとピアノの前にそれぞれ紗幕（図1）を張り、紗幕1と2、後方壁面を組み合わせて景色などを投影することにより、舞台セットを最低限に抑え、場面転換を容易にできる工夫を行なった。このプロジェクションマッピング的な手法を用いたことも、舞台上にオーケストラを設置したこととともに今回の大きな特徴である（写真2・3）。

課題克服上苦労した点

オーケストラの配置が図の通り通常とは異なるため、演奏者同士の音の聴こえ方が普段とは違い対応に苦慮した。また全公演が演劇専用劇場のため、反響板を用いることが難しく、PA（音響機器）を使用しての演奏となった。実際の音をマイクで拾い、指揮者、オーケストラ、ピアニストに音をモニターで返す方式としたことも、クラシック音楽のジャンル、特にプロコフィエフ、バルトークのピアノ協奏曲などのアンサンブルを難しくした。これについては、毎公演、モニターに返す楽器の音量バランスなどを音響チームと調整を重ね、最終的に主軸となるピアノの音量を役者（歌手）、指揮者、各楽器パートそれぞれにバランス調整をし、それぞれに適したバランスで返すことで、安定したパフォーマンスが可能となった。劇中歌での役者とのアンサンブルも、ポップス音楽でいうドラムなどのリズム隊がオーケストラには存在しないため、ピアノがテンポ維持のうえでも重要な役割を担った。

本番を通しての筆者所見

今回の舞台での音楽の役割は、伴奏やBGMとしてだけでなく、作品中の主体としての立ち位置で演奏するという役割も担うもので、クラシック音楽の普及に向けて新たなターゲット層への架け橋となり得る取り組みであると感じた。

「シンフォニー音楽劇」という新たなジャンルとして、オペラとは異なり、オーケストラをピットではなくステージ上で敢えて見せ、オーケストラ奏者の演奏姿そのものが、視覚的にも観客の音楽への実体験としても効果的であったと言える。

またピアニストとしては、劇伴、劇中歌、独奏曲、ピアノ協奏曲のソリストに至るまで、幅広い役割を果たす必要があり、場面ごとに異なる緻密さを求められる現場であった。

本音楽劇はコンサートではなく、劇でもなく、演奏や演奏家そのものが演出されるという、いわば音楽が主役の作品であり、音楽の本質を伝えるための構成が生み出した、他に類を見ない新しい形でのステージとなった。キャストそれぞれのファン、クラシック音楽ファン、原作ファンなどすべてに向けたエンターテインメント作品になったのではないかと思料する。

なお、前半後半の2幕構成とした理由の一つにオーケストラの舞台上での拘束時間という問題があった。今回のオーケストラとの契約規約では、舞台上で1度に60分を越す拘束の場合、1度休憩を挟む必要があった。そのため、1幕はOverture以外オーケストラの演奏場面は設けず、ピアノのみが音楽的役割を担った。一方後半2幕は、劇伴音楽、劇中歌、物語上のコンクール本選シーンで演奏するピアノ協奏曲に至るまですべてをオーケストラ、もしくはピアノとオーケストラで演奏した。

今回の劇中歌はクラシック音楽の旋律（ベートーヴェン作曲 ソナタ第8番「悲愴」より第2楽章、ショパン作曲 24の前奏曲より第4番、ドビュッシー作曲 月の光など）に原作者の恩田陸氏自ら書き下ろした詞を乗せ役者が歌い、耳馴染みのあるクラシック音楽の有名な作品を歌にすることで、自然とクラシック音楽の世界に入りやすく演出されていたことも、作品の軸にある世界観を逸らさずに物語を進行する上で効果的であった。

ミュージカルの要素、筆者によるピアノ独奏、コンクールの新曲課題として音楽監督の千住明氏が作曲した現代音楽「春と修羅」やプロコフィエフ、バルトークのピアノ協奏曲など、ライトな楽曲から現代音楽、クラシック既存作品まで幅広いジャンルをしっかりと聴かせるシーンを設け、演劇とコンサートが融合した新たなジャンルとして確立できる可能性を感じた。

難しい点としては前述の通り、公演中、ピアノ協奏曲などの難易度の高い作品も初日を迎えてからは、通常の演劇と同じく開演までのスケジュールは分単位で各スタッフの確認作業時間に充てられるため、演奏者はサウンドチェック程度で基本的にリハーサルはなく、連日演奏を重ねていく中で役者や奏者間の微調整をしていくことと、演劇専用の劇場ではPAを使用せざるを得ない点である。今回は音響チームとの緻密なやり取りで克服できたが、音響チームとのコミュニケーションが十分にとれない場合は、大きなリスク要因となりかねない点は指摘しておきたい。

実現具体例

このシンフォニー音楽劇というステージの実現には、各専門分野の連携と多くの人材が必要とされるが、仮に名古屋芸術大学で企画した場合、本学の多様なコースの結集により開催可能と考える。下記の表の通り、各スタッフ、役者、音楽にわたるほぼすべての分野を本学の学生で網羅できるからである。本学すべての領域が関わることにより、あらゆるコースの学生がそれぞれの分野の力を発揮できる機会として開催する意義は大きいと考える。

	名古屋芸大に置き換えた場合の領域・コース名
キャスト	音楽領域 声優アクティングコース、ミュージカルコース
音楽	音楽領域 サウンドメディア・コンポジションコース
ピアノ	音楽領域 鍵盤楽器コース（ピアノ）
オーケストラ	名古屋芸術大学フィルハーモニー管弦楽団、名古屋芸術大学ウインドオーケストラ、音楽領域 鍵盤楽器コース（電子オルガン）
脚本・演出	舞台芸術領域 舞台プロデュースコース、デザイン領域 文芸・ライティングコース
舞台美術	舞台芸術領域 舞台美術コース、音楽領域 ミュージックエンターテインメント・ディレクションコース、美術領域 コミュニケーションアートコース
照明	舞台芸術領域 演出空間コース、音楽領域 ミュージックエンターテインメント・ディレクションコース
音響	音楽領域 サウンドメディア・コンポジションコース、ミュージックエンターテインメント・ディレクションコース、舞台芸術領域 演出空間コース
大道具	舞台芸術領域 舞台美術コース
映像	デザイン領域 ヴィジュアルデザインコース、イラストレーションコース、先端メディア表現コース
舞台監督	舞台芸術領域 演出空間コース
WEB制作	デザイン領域 ヴィジュアルデザインコース、メディアコミュニケーションデザインコース

まとめ 本音楽劇公演の意義

コロナ禍の中での公演となったため、観客数の入場規制など様々な問題もあったが、音楽監督の千住明氏をはじめとした知見を集結した新たなジャンルへの挑戦であり、“観せる”演劇と“聴かせる”コンサート、双方のバランスを採った新たな舞台芸術の試みとして大変意義深い公演であったと考える。

オーケストラを舞台上に配置することに伴うアクティグスペース確保の問題や、クラシック音楽を奏する場合の、音響の奏者側への聴こえ方などの問題点はあるものの、オペラやバレエなどの舞台芸術とは異なるアプローチで、クラシック音楽を普段聴く機会の少ない顧客層に向けた長期間にわたる公演は、貴重な記録であり興味深い経験となった。

コスト面でも、大掛かりな舞台セットをプロジェクションマッピングでの投影にすることで予算を抑え、オーケストラを使用した大掛かりな「シンフォニー音楽劇」の開催を可能としたことは、今日のクラシック奏者の新たな演奏の場としての可能性を孕んでいるといえそうである。

今後人数を抑えた編成によるオーケストラへの変更など、コストを抑えつつ高い演出効果が得られる取り組みを強化することで舞台上での課題を解決し、現代の新しい舞台芸術として「シンフォニー音楽劇」という一つのジャンルが確立できると確信した。

最後に、本稿を執筆するにあたり、主催のシンフォニー音楽劇「蜜蜂と遠雷」制作実行

委員会、脚本・演出のモトイキシゲキ氏に貴重な資料、写真を御提供頂き、取材をさせて頂いたことへの感謝を、この場で述べたい。

・上演曲目

オープニング「ひかりを聴け」Overture 作曲=千住明

サティ：ジュ・トゥ・ヴ

ドビュッシー：月の光

J. S. バッハ=グノー：アヴェ・マリア

「幸福の王子——ショパン：24のプレリュードより op. 28-4」 作詞=恩田陸 編曲=千住明

ベートーヴェン：ピアノソナタ第8番「悲愴」第2楽章

「春と修羅——Cadenza 0番」 作曲=千住明

「あなたがほしい——サティ：ジュ・トゥ・ヴ」 作詞=恩田陸 編曲=千住明、石川洋光

「月の光——ドビュッシー：月の光」 作詞=恩田陸 編曲=千住明

「休息——ベートーヴェン：ピアノソナタ『悲愴』」 作詞=恩田陸 編曲=千住明

プロコフィエフ：ピアノコンチェルト第3番 第1楽章

バルトーク：ピアノコンチェルト第3番 第1楽章

「ひかりを聴け」 作詞=恩田陸 編曲=千住明

参考文献

シンフォニー音楽劇「蜜蜂と遠雷」公式HP <https://mitsubachi-enrai.jp/>

写真提供

シンフォニー音楽劇「蜜蜂と遠雷」制作実行委員会